保健体育科での教育実習の経験が
教師の資質・能力と教員志望度に及ぼす影響

青　木　敦　英

1．はじめに

教育実習は学校現場での教育実践を通して，学生が教職への適性や進路を考える貴重な機会であるとされている（文部科学省，2006）．教育実習の目的は一般的に次のようなことが挙げられている．①教育職員免許法上の「教職に関する科目」における必修として，「教育実習」という単位を取得するため．②大学で学んだ様々な知識や技能を，実際の教育現場で活用することを通して，教師としての基本的で実践的な力量を習得するため．③生徒との触れ合いをとおして，生徒の理解を深めるとともに，生徒との関係の取り方を習得するため．④学習指導に限らず，日常的な学校業務の実際に携わり，教師の職務について理解を深めるため．⑤教師としての使命や誇り，教育者としての自覚を育てるため．⑥教育実習を通して得た経験を，大学での今後の学びや研究活動にいかして，大学生活を充実させるため（杉山ほか，2010）．とくに近年では教師に求められる力量として，専門的な知識を有しているだけではなく，教育現場で実際に生かすことができる実践的指導力が求められており，教育実習では教員として必要な資質や能力を確実に身につけることが重要となる．

教育実習の経験が学生たちの教員志望に影響を与えていることが様々な教育実習生を対象として調査がなされている．今栄と清水（1994）は小学校および中学校で教育実習に参加する学生を対象に実習の前後に教員の志望動機の強さを調査したところ，教育実習によって学生の教員志望動機が強まったことを報告している．芦屋大学（以下本学）においても保健体育科での教育実習を経験した学生の教員志望度が向上する傾向にあることを報告した（青木，2015）が，教育実習前後の教員志望度に変化がない，または低下する学生がいることも報告（林，1991；平井ほか，1998）されており，これは先述したように，教育実習が教職の適性について知る機会でもあることが一因であろう．しかし教員志望の度合いや教員適性度が高いほど，教育実習で教師として必要な資質・能力を身につける傾向にあることが知られている（林，1991；別惣と長澤，2003）．平井ほか（1998）は保健体育科で教育実習を体験した学生の教員の適性評価と教員志望の意欲は大きく関連していることを報告し，教員を第一志望とすることで教師としての多くの資質や能力を身につける可能性は高いことを示唆した．基本的に教育実習に参加する学生は，教員を志望することが条件とされているが，学生それぞれの教職への熱意や志望の度合いには差がみられ，なかには教員を志望しないにも関わらず教育実習に参加する学生も少なくない（滝沢ほか，2018）．これまでに本学の保健体育科で教育実習を経験した学生が，どのような資質や能力を教育実習で身につけたのか，またその能力が教員志望度にどのように関連しているのか明らかになっておらず，この点を明らかにすることで，今後の教員養成課程において活用できる資料となり得る．そこで本研究では本学の保健体育科で教育実習に参加した学生を対象に，教育実習後に教師に必要な資質・能力に関する調査および教員の志望度合いについて調査し，それらがどのように関連しているのか検討を行った．

2．方法

2.1　対象

芦屋大学臨床教育学部教育学科に所属する学生（科目等履修生も含む）で，平成 29 年度および平成 30 年度の中学校および高等学校にて，保健体育科で教育実習を行った 63 名（平成 29 年度 33 名，平成 30 年度 30 名）を対象とした．その中から，後述の調査時期でまだ教育実習を終えていない学生および回答に不備のある学生を除外した結果，43 名が本研究の対象となった.

2.2．調査時期

平成 29 年度および平成 30 年度の「教育実習事前指導（保健体育）」での最終回（7 月，教育実習後）の講義時間内に一斉に実施した．回答に際して，調査の回答結果が成績に反映されないこと，また研究活動における基礎資料となることを説明した.

2.3　調査項目

（1）教師に必要な資質・能力に関する自信尺度調査

教師としての資質・能力に対する自己評価のために，別惣と長澤（2003）が作成した教師に必要な資質・能力に関する自信尺度についての 40 項目からなる質問票を一部改変して使用した．質問への回答は「とてもあてはまる」を 4 点，「ややあてはまる」を 3 点，「あまりあてはまらない」を 2 点，「全くあてはまらない」を 1 点とする 4 段階にて回答させた.

（2）教員志望度

教育実習の前後で教員に対する志望度合い（どの程度自分が教員になりたいのか）がどのように変化したのかを 0～100％までの数値にて具体的に示させた．これらの調査を元に，教育実習の前後で教員志望度が維持または向上した群（維持向上群）と教員志望度が低下した群（低下群）を設定し，自己評価得点の比較を行った.

2.4　統計処理

教育実習前後の教員志望度の変化については対応のある t 検定を行い比較を行った．また，教育実習の前後で教員志望度が維持または向上した群（維持向上群）と教員志望度が低下した群（低下群）との比較については，各質問項目の平均値と標準偏差を算出し，対応のない t 検定を行った．さらに，自己評価得点の平均値と教員志望度の変化との関係についてピアソンの相関係数を算出した．いずれも 5%未満を有意水準とした.

3．結果

3.1　自信尺度の自己評価と教員志望度の変化とその関係

表 1 は教師に必要な資質・能力に関する自信尺度の自己評価得点（以下，自己評価得点）の結果を示したものである．「生徒たちとの交流の仕方が学べた」，「自分から積極的にコミュニケーションをとることができるようになった」などのコミュニケーションに関する項目が上位にみられ，得点の平均値も 3.5 以上で多くの学生が身につけることができたと自己評価していた.

表1　教師に必要な資質・能力に関する自信尺度の自己評価得点の結果

項目番号	質問項目	平均値		標準偏差
8	生徒たちとの交流の仕方が学べた	3.72	±	0.73
12	教材研究や指導案の書き方が分かった	3.53	±	0.74
36	自分から積極的にコミュニケーションをとることができるようになった	3.51	±	0.83
37	任された仕事を成し遂げる責任感が身についた	3.51	±	0.80
11	生徒を教育することへの使命感が身についた	3.49	±	0.74
1	教師になるために必要な向上心や探究心を得られた	3.47	±	0.85
30	自分の感情をコントロールできるようになった	3.44	±	0.59
10	学習指導の基本的な技術・方法を習得できた	3.42	±	0.76
20	授業を振り返り、自らの課題を発見できるようになった	3.37	±	0.82
16	その場その場に応じて行動できるようになった	3.33	±	0.78
17	自分の教職への適性が判断できた	3.33	±	0.64
3	自己表現力を身につけることができた	3.28	±	0.73
4	何事に対しても積極的に行動できるようになった	3.28	±	0.77
13	教材やカリキュラムの内容についての理解が深まった	3.28	±	0.83
28	教場の環境整備について気を配るようになった	3.28	±	0.77
38	指導目標にそって授業ができるようになった	3.28	±	0.73
7	教師として成長していくための学習方法がわかった	3.26	±	0.79
15	掲示資料等の準備や板書ができるようになった	3.26	±	0.88
21	自主性・積極性が養われた	3.26	±	0.85
40	集団場面でリーダーシップを発揮できるようになった	3.26	±	0.76
29	生徒の個人差に応じた指導ができるようになった	3.23	±	0.72
2	失敗しても気分が落ち込まないようになった	3.21	±	0.80
14	柔軟に物事が考えられるようになった	3.21	±	0.80
32	人前で話すときも緊張しなくなった	3.21	±	0.89
39	授業場面で生徒に適切な対応ができるようになった	3.21	±	0.77
6	教育問題への関心が高まった	3.19	±	0.96
25	生徒の発達、興味、内面の動き等について理解できた	3.19	±	0.70
27	教育について自分の考えが持てるようになった	3.16	±	0.84
35	教科内容を理解し、教材研究ができるようになった	3.14	±	0.74
22	教員という仕事に魅力を感じるようになった	3.12	±	0.91
5	今後大学で学ぶ際の学習課題の発見に役立った	3.07	±	0.86
19	生徒に対して適切な指導をし、学級をまとめることができた	3.07	±	0.88
18	社会での出来事と教育の関係を頭に入れて指導ができるようになった	3.02	±	0.80
9	一見、無意味なことに理由があると思えるようになった	2.98	±	0.89
24	生徒からの質問に対して適切に対応できるようになった	2.95	±	0.69
31	生徒の問題行動に対して対応できるようになった	2.93	±	0.88
34	綿密な指導計画を立てることができるようになった	2.93	±	0.70
23	学級経営の方法・技術が身についた	2.86	±	0.71
26	教師を目指す自覚が身についた	2.81	±	0.96
33	教育改革の動向に関心が持てるようになった	2.81	±	0.79

図1は教育実習前後の教員志望度の変化について示したものである．教員志望度の平均値は実習前60.4±29.6%，実習後63.4±31.2%とやや上昇したが統計的に有意な差は認められなかった．また教育実習前後の教員志望度の変化については，志望度が維持（変化なし）または向上した学生が30名，志望度が低下した学生が13名みられ，教育実習で30%程度の学生に教員への志望度の低下がみられた．

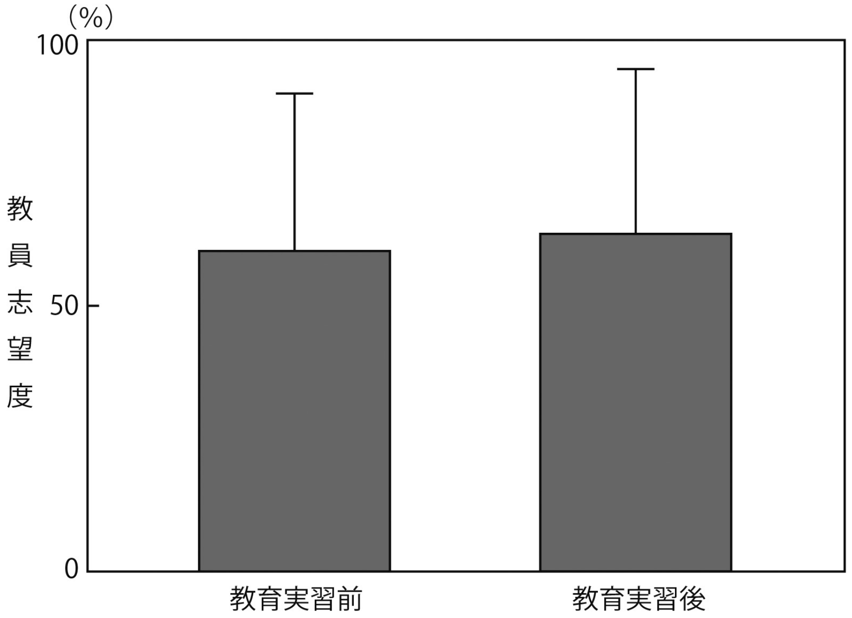

図１　教育実習前後の教員志望度の変化

図２は横軸に自己評価得点の個人平均値と，縦軸に教育実習の前後で教員志望度が変化した割合（変化率）との関係を示したものである．両者の間に，5％水準で有意な正の相関関係が認められた．

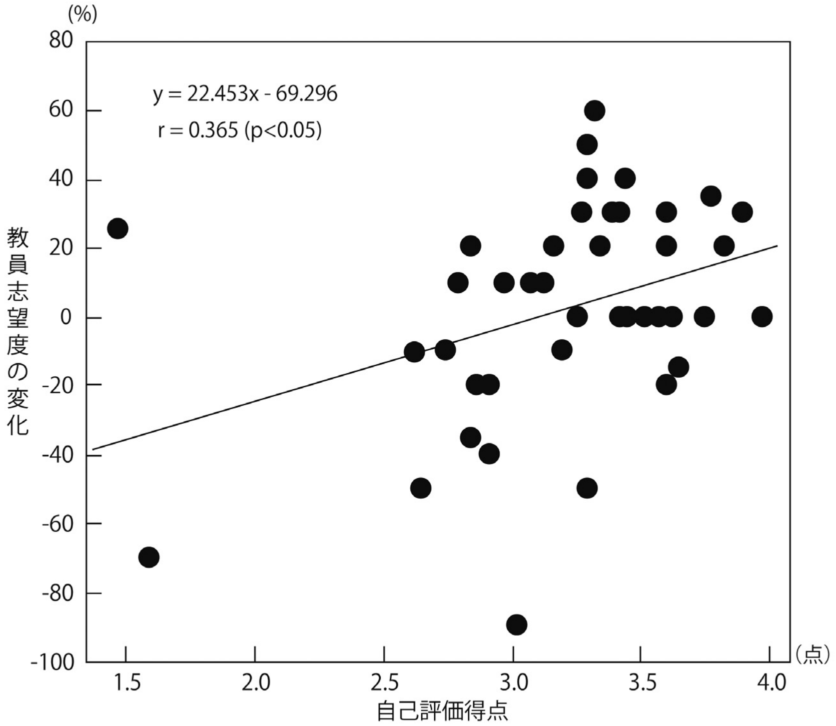

図２　自己評価得点と教員志望度の変化との関係

3.2　教員志望度の維持向上群と低下群の自信尺度の自己評価比較

表 2　教員志望度の維持向上群と低下群の自信尺度の自己評価得点の比較

質問項目	維持向上群（n＝30）			低下群（n＝13）			diff.	p
	平均値		標準偏差	平均値		標準偏差		
教師を目指す自覚が身についた	3.13	2	0.90	2.08	2	0.64	1.06	0.000
教員という仕事に魅力を感じるようになった	3.43	2	0.77	2.38	2	0.77	1.05	0.000
綿密な指導計画を立てることができるようになった	3.17	2	0.65	2.38	2	0.51	0.78	0.000
教材やカリキュラムの内容についての理解が深まった	3.50	2	0.68	2.77	2	0.93	0.73	0.020
掲示資料等の準備や板書ができるようになった	3.47	2	0.63	2.77	2	1.17	0.70	0.060
社会での出来事と教育の関係を頭に入れて指導ができるようになった	3.23	2	0.82	2.54	2	0.52	0.69	0.002
今後大学で学ぶ際の学習課題の発見に役立った	3.27	2	0.78	2.62	2	0.87	0.65	0.030
生徒に対して適切な指導をし、学級をまとめることができた	3.27	2	0.74	2.62	2	1.04	0.65	0.057
教育改革の動向に関心が持てるようになった	3.00	2	0.83	2.38	2	0.51	0.62	0.005
教育問題への関心が高まった	3.37	2	0.85	2.77	2	1.09	0.60	0.095

表 2 は教員志望度の変化について教育実習前後で志望度が維持または向上した群（以下，維持向上群）の学生（30 名）と教育実習前後で志望度低下した群（以下，低下群）の学生（13 名）について，自己評価得点を両群で比較し，とくに得点差（diff.）が大きい 10 項目を示したものである．P 値が 0.05 以下と有意な違いがみられた項目は「教師を目指す自覚が身についた」,「教員という仕事に魅力を感じるようになった」,「綿密な指導計画を立てることができるようになった」,「教材やカリキュラムの内容についての理解が深まった」,「社会での出来事と教育の関係を頭に入れて指導ができるようになった」,「今後大学で学ぶ際の学習課題の発見に役立った」,「教育改革の動向に関心が持てるようになった」の 7 項目で，いずれも維持向上群が大きな自己評価得点であった．

4．考察

本学の教育実習を経験した学生の教師に必要な資質・能力に関する自信尺度の自己評価得点は，「生徒たちとの交流の仕方が学べた」,「自分から積極的にコミュニケーションをとることができるようになった」などのコミュニケーションに関する項目が上位にみられた．また「任された仕事を成し遂げる責任感が身についた」,「生徒を教育することへの使命感が身についた」など，教員の仕事として必要な責任感や使命感などの能力についての得点が高くなる傾向がみられた．一方，下位の項目では「生徒の問題行動に対して対応できるようになった」や「学級経営の方法・技術が身についた」など生徒指導や学級経営に関する事項で得点が低くなる傾向がみられた．秋光（2011）は小学校教員養成系大学の学生および大学院生を対象に，教育実習で身につけた教師としての資質・能力に関する調査を行い，因子分析を試みたところ，第 1 因子として「教職意欲の向上」，第 2 因子として「指導技術の習得」，第 3 因子として「学級経営力の向上」が抽出できたことを報告している．また，前田と佐藤（2014）は，教育実習に対する学生自身の評価において，「教育観，学校観，教師観の深化」,「授業構想，実施，評価方法の力量の向上」が教育実習の成果として高いものとなっていたことを報告している．これらの先行研究と本研究では質問項目や調査内容が異なってい

るために単純に比較することはできないが，本学の学生においても質問項目の多くで 3 点以上の自己評価が得られ，教育実習を通して教職への意欲の向上や保健体育の教員としての指導技能を身につけたことによる実践的指導力の向上が伺えるものであり，教員としての資質・能力の習得について自信がついたことが推察される．ただ，本論の冒頭でも述べたように教育実習の目的は多様化しており，短い実習期間の中ですべての能力を身につけることは難しい．まずは教職への意欲を高めること，指導の技能を習得することができたことなど，教育実習で一定の成果を上げ自信を得られていることが本研究から確認することができたものの，本学の学生の課題として，生徒への対応や学級経営などの資質・能力の習得については改善の余地があると考えられる．

本研究では教員志望度については教育実習の前後で有意な上昇は認められなかったが（図 1），教育実習の前後で教員志望度が変化した割合（変化率）と自己評価得点には有意な相関が認められ（図 2），教員志望度と教育実習で身につけた資質・能力が関連していることが示唆された．先行研究においても，教員志望の度合いや教員適性度が高いほど，教育実習で教師として必要な資質・能力を身につける傾向にあることが報告されており（林，1991；別惣と長澤，2003），基本的にこれらの先行研究の結果を支持する結果となっていた．また，教員への志望率が低下した学生がいることも確認されたが，他大学においても教育実習中に教職に対する意欲や自身をなくしてしまう学生がいることが報告されており（国立大学協会教員養成制度特別委員会，1993；阿形，2005），この点については本学に限った問題ではない．しかし，なぜ意欲を失ってしまったのかについて論議された研究は見当たらない．本研究ではこの様相を探るために，教師に必要な資質・能力に関する自己評価が教員志望に影響を与えている可能性があると考え，教育実習前後で教員志望度が維持または向上した維持向上群と教育実習前後で志望度が低下した低下群の自信尺度の自己評価得点について比較を試みた．その結果，7 項目で有意な差が認められ，いずれの項目も維持向上群が大きな自己評価得点であった（表 3）．その内容を吟味すると，「教師を目指す自覚が身についた」および「教員という仕事に魅力を感じるようになった」の 2 項目については 1 点以上の大きな差（$p<0.001$）が認められた．これらの質問項目は直接的に教員への志望に関わる質問である．すなわち，自己評価得点が高い，つまり自己有能感が高まることで自信が芽生え，教職への意欲も相乗的に高まっていくことが推察される．さらに「社会での出来事と教育の関係を頭に入れて指導ができるようになった」および「教育改革の動向に関心が持てるようになった」という質問項目について平均値で 0.6 点以上の差，かつ統計的に有意な差（$p<0.01$）が認められたが，これら質問項目は教育が社会でどのような役割を担っているのか，教育が社会的に果たす使命について問う質問項目であった．今後教員を志望する学生に対して，教師を仕事として捉えることができ，なおかつ社会と教育との関係や，今後の教育改革の動向について目を向けさせていくことが教員としての資質を高める上で必要であろう．

5．まとめと今後の課題

本研究は，芦屋大学の保健体育科で教育実習を経験した学生を対象に，教師に必要な資質・能力に関する自信尺度の自己評価得点アンケートを実施するとともに，教育実習前後の教員志望の度合い（教員志望度）の変化について調査し，教育実習の経験が教師の資質・能力の自己評価および教員志望にどのように影響を及ぼしているか検討を行った．教育実習前後の教員志望度の変化については，志望度が維持（変化なし）または向上した学生が 30 名，志望度が低下した学生が 13 名おり，教育実習で 30％程度の学生に教員への志

望度の低下がみられたが，教員志望度の平均値には統計的に有意な差は認められなかった．また，教育実習で自己評価得点と教育実習の前後で教員志望度が変化した割合（変化率）には，有意な正の相関関係が認められ，教員への志望度が高いことが教員としての自己評価得点が高い傾向にあった．さらに教育実習前後で志望度が維持または向上した学生と，教育実習前後で志望度が低下した学生では，教育実習で身につけた教員としての資質・能力に違いがあることが示唆された．以上のことから，教育実習を経験した学生についての教員志望度の変化と教育実習で得られた教師の資質・能力の自己評価の様相についていくつかの知見を得ることができた．

その他の教育実習における問題点として，教職を希望していないにも関わらず教育実習を行う学生が多いことがあげられる（滝沢ほか，2018）．本研究の対象となった学生においても，教育実習前の教員志望率がかなり低い学生がいることを確認しているが，家田ら（2016）は保健体育科教育実習を履修した学生を対象に教職への意欲と教育実習との関係について調査したところ，教職への意欲や教職への適性が高い学生が教育実習に対する総合評価が高いことを報告している．また，教育実習を受け入れる側が感じている教育実習の問題点としても，教員希望の学生とそうでない学生の間に意欲の差があることが報告されており（柴山ほか，2003），このような点も踏まえて，教育実習に向かう学生に対してより教職への意欲を高めることを検討しなければならない．

本研究の解釈として以下の点に留意する必要がある．本研究で実施した教育実習における自身尺度の調査は，学生本人の自己評価を用いていることから，本研究の結果が必ずしも正当な評価とはならない可能性もあり，学生が本当にその能力が身についているのかについて検討されたものではない．教育実習では指導教員の評価と実習生の自己評価にずれが生じていること（小山と村野，2017）や，教育実習生が自己評価を高く見積もる傾向にあること（相良と相良，2018）を考慮すると，実習先の指導教員の評価と照らし合わせて検討することも必要かも知れない．また，教育実習の前後で教員の志望度は向上するが，実際に教員の就職へはつながらないことが知られている（藤本ほか，2018）．本研究の対象となった学生においても教員採用試験を受験した学生は 11 名（本研究の対象者の 25.6%）に過ぎない．保健体育科での教員採用試験の合格者を輩出するためには，教育実習をきっかけとして教員を志望するのではなく，早い段階から教職への道筋を示し，教員採用試験に向けてしっかり準備を行うことが必要である．

引用・参考文献

阿形健司：学生の教職観に与える教育実習の効果―パネル調査の結果から―，愛知教育大学研究報告（教育科学編），第 54 巻，87-90，2005.

秋光恵子：教育実習経験が教師に必要な資質能力に関する自信と教師志望に及ぼす影響―実地教育Ⅲを履修した学部学生と大学院生の比較―，学校教育学研究，第 23 巻，43-52，2011.

青木敦英：保健体育科教育実習生の不安と教育実習前後の教員志望の変化について，芦屋大学論叢，第 66 巻，1-6，2017.

別惣淳二・長澤憲保：事前指導が主免教育実習に及ぼす影響に関する研究―社会教育施設と連携した観察実習を通して―，兵庫教育大学研究紀要，第 23 巻，125-135，2003.

藤本登・松元浩一・山田真子・牧野一穂・河合史菜・藤井佑介：実習生の意識調査から見た教育実習の現状と課題，長崎大学教育学部教育実践研究紀要，第 17 巻，117-126，2018.

林孝：教育実習経験と教職志望意識の形成に関する一考察．広島大学教育実践研究指導センター紀要，第 3 巻，11-22，1991.

平井佐紀子・新井猛浩・家田重晴・中川武夫・勝亦紘一：保健体育科実習生の教員志望，適性評価等の分析，中京大学体育学論叢，第 40 巻，63-83，1998.
家田重晴・李子耕一・小磯透・柿山哲治・勝亦紘一：教育実習指導の評価および教職への意欲と適性の自己評価に関する経年変化―体育学部・スポーツ科学部学生を対象として―，中京大学体育学論叢，第 57 巻，59-72，2016.
今栄国晴・清水秀美：教育実習が教員志望動機に及ぼす影響―事前・事後測定法による分析―，日本教育工学雑誌，第 17 巻（4），185-195，1994.
国立大学協会教員養成制度特別委員会：教育大学·教育学部学生の教職への意識と意見(中間報告)，1993.
小山祥子・村野かおり：教育実習における実習評価と自己評価の差異に関する研究，駒沢女子短期大学研究紀要，第 50 巻，81-89，2017.
前田一男・佐藤良：教職課程の学生による教育実習に関する経験：教育実習における困難とその解決，教職研究，第 24 巻，91-104，2014.
文部科学省：今後の教員養成・免許制度のあり方について（答申），教職課程の質的水準向上，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo 0/toushin/attach/1337006.htm，2006.（平成 31 年 4 月 1 日参照）
相良麻里・相良陽一郎：教育実習に関する効果的な事前・事後教育の検討―実習中に求められる自己受容性について（1）―，千葉商科大学紀要，第 55 巻（2），71-86，2018.
柴山直・高橋桂子・鋤柄佐千子・五十嵐由利子：受け入れ校からみた教育実習の実態調査に関する報告，新潟大学教育人間科学部付属教育実践総合センター研究紀要 教育実践総合研究，第 2 巻，63-74，2003.
杉山重利・佐藤豊・園山和夫：めざそう！保健体育教師，朝日出版社，pp 144-145，2010.
滝沢洋平・針谷美智子・和田博史・松本健太・伊藤雅広・片桐正広・歌川好夫・白旗和也：東京都世田谷区ならびに横浜市青葉区の中学校保健体育科の教師の意識に関する調査研究：保健体育科の授業，部活動，教育実習，生徒指導に着目して，日本体育大学紀要，第 48 巻（1），45-59，2018.